
狙われた月影―百鬼妖譚―

柚木夏莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狙われた月影——百鬼妖譚——

【Nコード】

N7717Y

【作者名】

柚木夏莉

【あらすじ】

弟の命を助けるため、湊は鬼の肝を探していた。

一方、鬼の氷上は、純血種の鬼としての大事な成人前の儀式を控えていたが——巡り合う筈のない種族二人が月光の下で出逢い始まる物語。

（他サイトでもシリーズ物で載せております。）

湊と氷上

暗く光をおとされた部屋の扉が、荒々しい足音に続いて突然開かれた。

響き渡るその木の音にも足を止めず、扉を開けた湊は^{みなと}学生服のままベッドに横たわる人物の側に駆け寄った。

目に映る姿はまるで霧でも浴びたように体中に汗の水滴が光っている。

「北斗……！」

その声に横たわっていた人物は薄く目を開いた。

「兄さん……」

そつと出した手はぞくりと冷たく、それを兄と呼ばれた湊はたまらないように握りしめた。

「死ぬな……！　しっかりしろ！　来月には移植に渡航するんだろ
う！？」

兄の必死な声に北斗は静かに笑んだ。

「その予定だったけど……もうもたないかもね。生まれた時からポンコツの心臓だったから」

その言葉に湊は目を歪ませた。

——まさか、ここまで悪くなっていたなんて……！

弟の心臓が悪いことは知っていたし、移植しか治療がないことも聞いていた。父も国内の移植では時間がかかりすぎると海外での手術を決意した矢先だったのだ。

——でも、こんなに急変するほど悪くなっていたなんて知らなかった……！

元々、弟とは母親が違っせいで普通の兄弟のように生活できなかった。

同じ広い屋敷に住みながら、東と西に別れて住んでいたのだ。

それでも、小さい頃から外にあまり出られない弟のたった一人の親友のつもりだった。

「しっかりしろ！　今すぐ僕が渡航先の病院に連絡するから！」

しかし弟は荒い息でゆっくりと笑った。

「無駄だよ。今すぐ渡航したって、体に合う提供者が見つかるまで待たないといけないのだから——」

間に合わない——そう笑う北斗の手を、湊はしっかりと掴んだ。

「諦めるな！　絶対に何をしたらって助けてやるから！」

必死な兄の形相に、北斗は微かに苦笑したように微笑んだ。

「じゃあ、兄さん……お願いがあるんだ」

「何！？ 何でも言ってくれ！！」

自分を見つめる兄の眼差しに、北斗にふわりと笑みが汗の中に浮かんだ。

「あのね……鬼の肝が欲しいんだ。伝説ではそれを食べたら、どんな病も治せるらしい。それが——欲しいんだ」

ぎゅっと北斗は湊の指を掴んだ。

「京都の大江山に生き残りがいると言われている……ただの、伝説かもしれない……でもこのまま死ぬよりは、伝説でもいいから縋りたいんだよ」

——死は嫌だ。

そう伝えてくる指を握り返し、湊は弟を見つめた。

——このまま死なせるぐらいなら……

「わかった！ 絶対に鬼の肝を手に入れてくる！ だから絶対に生きる」

百万分の一の無謀な賭けでもやってみよう——そう握る手で伝えると、湊は弟を頼むと側にいた看護師に頭を下げ、部屋を飛び出していったのである。

幽玄な月がその白い姿を雲間から現すにつれて、氷上はその美しい顔で溜め息をついた。

氷上の髪は月の光に、銀色に輝き、周りに真珠色の煌めきを投げかけている。肌は柔らかな透ける桜色で、唇だけがほのかに濃い紅を落としたように揺らめいていた。

伯父とよく似た金色の瞳が、鬼であることを表しているが、それは長い睫に憂鬱げに閉ざされた。

「お！ 氷上！ いよいよ明日はお前の契り固めの日だろ？ 何しかた面してんだよ」

勢いよく背中を叩いてくる星川を氷上はじろりと睨みあげた。

「憂鬱にもなるぜ。まったく……じい様共が雁首並べて何事かと思ったら、どうか明日の祝宴では、伯父の茨木を選んでくれなんて！ 何で俺がオジキに抱かれなれないといけないんだよ！？」

「ははっ、そういうことか！ まあ、いい加減長老方もやきもきしているからなあ」

憤る氷上をどうどうとあやすように、星川は氷上の小さな肩を叩いた。

「首領のオジキが独身で跡取りができないからって、俺に押しつけんな！」

「鬼は女の数が圧倒的に少ないからな——まあ、茨木の独身主義は

そのせいじゃないが」

笑いながら自分の背を叩く星川の逞しい姿を見上げ、氷上は悶絶した。

「よってたかつて、みんなして俺に女になれって言いやがって！俺は誰より強い男の鬼になりたいんだー！」

頭を抱えて叫ぶ氷上の、銀の髪の間から覗く小さな白銀の角を見つめて、星川は苦笑をこぼした。

——まあ、長老達の願いもわからんでもないけどな。

鬼は、その角が伸び始めたら、成人の準備を体が始める。

人の腹を借りて産まれた鬼の八割は生粋の男——そして純潔の鬼が子供から大人になる時、選ぶのも七割が男だ。圧倒的に女が少ない。

鬼は鬼同士で産まれた純血の鬼だけが両性で生まれ、成人するに従い性別を選べる。

角が伸び始めたら産まれた月の満月の夜に、契り固めの宴で、三年後の元服の日の添い臥しの相手を選ぶ。

添い臥しとは人間の世界でも古代には行われていたが、異性と一夜を共に過ごすことをいう。人間の世界では形骸化で単なる添い寝もあつたらしいが、鬼では違う。その夜、契り、精を交わすことによって、一人前の妖しとなるのだ。

おそらくそれは神に仕える者が一生純潔を維持しなければなら
ないのに対して、鬼は他人の精気を己の力として生きる妖しに属す
からだろう。

——けれども

星川は目の前の親友の妹の子供が、銀の髪を掻き回す様を面白そう
に見つめた。

——やっぱり男の方が強いから、みんな男になりたがるんだよなあ。
鬼にとっては強さは誇りである。なんでなよとした背格好を選
ぶ必要があるのかと、女性希望者は少ない。

——まあ、人から産まれる鬼に男が多いせいで、確かに男社会だよ
な……

きっと女の鬼になれば、誰より美しいだろうと惜しみながら、星
川は氷上の細い肩を叩いた。

「じいさん達の言うことを気にするな。お前はお前の好きな方を選
べばいい」

「星川……」

じーんと氷上は見つめた。

「ありがとう。もてないのに競争率高くなるのを応援してくれるな
んて……俺、お前を見直した」

「俺は軽くお前を蹴りたくなつた」

まったく星川は、黒い髪を揺らしながら、溜め息をついた。

「こう見えても、それなりにもてるんだぞ。その証拠に」

ふつと星川は笑った。

「天狗や妖狐、化け猫の知り合いに頼んで、明日一族の女の子に宴に参加してくれるように頼んでおいた」

「星川——」

「男になるなら、明日は女を選ばないとダメだろうが？ 鬼に女は少ないからな」

「星川！」

ぱつと子供が喜ぶように氷上は星川に抱きついた。

「バカ！ 恥ずかしいから離れろ！ だけど明日口づけした相手で契りを交わす契約が結ばれるからな。くれぐれも慎重に選べよ」

「うん！」

まだまだ子供っぽい素直さで返事をする氷上を、まるで弟のように星川は愛おしげに頭を撫でた。

満月が山の木々を青く照らし、深い黒い影を地上に横たわらせる

夜、微かに響いてくる笛の音に湊はにっと眼下に灯る明かりに笑みを浮かべた。

岩陰に立ち見下ろすと、下の少し開けた所に古い荒れ寺のような
のがあり、そこから楽しげな楽の音が響いてくる。

「ビンゴ」

小柄な姿で腕を組みながら、湊は明かりを見つめた。

「里の者に聞き回って、言い伝えを調べた甲斐があった。――まさか本当に満月の夜に鬼の酒盛りがあるとはな」

――ここらでは、満月の日に鬼が酒盛りの相手に娘を攫うと言われている、その日だけは女の子は山に入るなと言われましたなあ。

猫を抱きながら懐かしそうに話してくれた、麓の集落の老女の顔を思い出した。

――昔は山の荒れ寺で鬼の歌う声が聞こえたとか……満月の日に山に入るなんてくわばらくわばらと言いましたわ。

「ところで」

後ろからかけられた声に湊は記憶から引き戻され、振り向いた。

後ろでこほんと咳をしたのは、西紀にしきだった。

「本当にその姿で行くつもりですか？」

「当たり前だろう?」

母親を早くに亡くした自分の世話係をずっとしてくれていた穏やかな風貌の青年に、湊は少年らしくにつと笑った。

しかし着ている物は、撫子を描いた濃い紅色の浴衣である。

「神話の時代から、敵の懷に潜入して油断させるには、女装は常套手段！ 酒盛りの相手に娘を攫うほど女に飢えた奴らだ。みてろ、必ず見事誑かしてやる！」

「くれぐれも危ないことはしないでくださいよ」

決めたらひかない湊の性格を熟知した西紀は溜め息をつきながら、こぼした。

「大丈夫、必ずうまくおびき出すから、お前は鬼がきたら頼むよ」

そう愛らしい少女の姿で、湊はにつこりと笑った。

明るい月の光の中に太鼓の音が冴え渡る。

バチを持ちながら踊っている鬼達の側で、狸が頭に木の葉を乗せて楽しげに横笛を吹き鳴らしている。

澄んだ大氣に音が弾け、それに伴い楽しそうな笑い声があちこちから聞こえた。

「氷上ももうそんなに大きくなったんだなあー」

「この前生まれて、ぴいぴい泣いていたと思ったのに」

男の鬼達は既に顔を赤らめ、大きな朱色のさかずきに注いだ酒を笑いながら飲み干している。

荒れ寺の縁側に座り、小さなさかずきで酒を飲んでいる氷上の隣には、首領茨木とその妹である氷上の母鬼が座り、その氷のような絶世の美貌に鬼達は見惚れていた。

ほかに女の鬼も幾人か集まり、座を盛り上げるのに神楽を踊ってくれていたが、どうにも氷上の表情は浮かない。

——みんな人妻じゃないか！

考えてみれば、絶対的に少ないのだから、女鬼にはもう決まった相手がいて当然だった。

自分の伴侶が指名されたりしないようにと、眼光鋭く睨んでくるその夫の前で、いくら首領の血族でも添い臥しの相手を選ぶわけにもいかない。

——それにみんなすぐく年上だ……

がつくりと氷上は肩を落とした。

そんな氷上の前に突然妖艶な美女が現れた。

「浮かぬ顔をしておるな。わらわを選んだら、一夜で男としての楽

しみの絶頂を極めさせてやろうに」

九尾を鮮やかに金色に揺らしながら顎に手をやる妖狐の嫣然とした笑みに、氷上は思わず腰が逃げた。

「ん？ どうじゃ、帝さえとろかす妖狐の蜜の味を知りとうはないか？」

しかし氷上が言葉を発するより先に、横から薙刀が二人の顔の間に差し込まれた。

「黙れ、淫乱狐」

氷上がその声の方に目をやると、墨色の衣を修験者の如く着こなした伶俐な面差しの女性がいた。美しいが、鼻がひどく高く見えるのは気のせいではない。

「お前などに鬼の首領の甥を任せられるか。氷上、私達天狗一族の女性を選ぶなら、お前に我らの山でみっちり修行を積ませてやる」

——どっちも御免だ！

思わず氷上は心の中で叫んだ。

——俺にだって、理想ぐらいある！ 初めてなんだから、同じ年ぐらいで、俺より小さくて……

「妖怪はほとんどが百歳以上だよ。その中でも私らは若いうちだよ」

「見た目だけな！」

まるで考えを読んだかのように今風の女子大生ぐらいの姿ですりよつてきた化け猫の女の子を氷上は思わず腕で防いだ。

「見た目若かったら、いいでしょー？」

「最低五十歳以上揃いが何を言う！」

——見た目若くても、中身は喰わせ者揃いじゃないか！

「若い方じゃん！」

きやはははと笑う化け猫の女の子達がゴロゴロと転がるのを見ながら、氷上は頭を抱えた。

——もつとほかにいないのか……こう、小さくて守ってやりたくないような可憐な……

そうふと目を上げた時、その姿が氷上の目に映った。

——いた。

響く太鼓の音の向こうに、紅い浴衣に撫子の花を美しく描いた、大きな瞳の少女が目に入る。短い黒い髪を花の髪留めで飾り境内の端で不安そうに立っている。

元々小柄なのだろうが、筋骨逞しい鬼達の間では、その姿はひどく細く頼りなく見えた。背はおそらく氷上の肩ぐらいだろう。

初めてみるその子は愛らしい風貌で、ただじつと氷上を見つめていた。

「おい、お前——」

氷上が声をかけようとした時、急にそれに気づいた星川が声を張り上げた。

「おい！ 人間の娘は連れてくるなど言っただらうが！」

それに側にいた小鬼が頭を下げた。

「すみません。山の中で道に迷ったと、さっき境内に入ってきたんです。すぐに追ひ払いますので——」

「迷ったのなら仕方ないよな」

上機嫌で氷上はよつと腰を上げた。

「こんな暗い中歩かせて、崖から落ちたりでもしたら大変だ。明日の朝、俺が里まで送っていつてやる」

「おい、氷上——人間はダメだぞ」

慌てたように言う星川の言葉も聞かず、氷上はもっと顔を見ようと近寄ろうとした。

その時、一人の男の鬼が近づいてきた。

「氷上——俺を選ばないか？　一生贅沢させてやるぜ」

お前、綺麗だもんなと笑う男の腹に氷上は咄嗟に拳を入れた。

「俺より弱い鬼に興味はない」

大人の鬼を一撃で悶絶させた、まだ小さな角を持つ鬼を見つめて
湊は思わず心で呟いた。

——なんか、むかつく。

月の光に髪は冴え冴えと眩く輝き、瞳はまるで金色の水晶だ。百合のように凜と夜の中に浮かび上がる姿は、人でない身であっても目を奪われる程に美しく、鬼なのに神々しくさえも見える。

——僕なんて、背が低くて女顔だからさんざんからかわれてきたのに……

同じくらいの年格好なのに、世の中にはこんなにも美しくてカッコいい男がいるのかと思うと無性に腹がたった。

——こいつに決めた。

湊は静かに微笑んだ。

——こいつの肝なら、確かに神通力がありそうだ……

産まれた時からろくにベットから出られない弟、身体測定の度にチビとからかわれ身長順で一番前に並ばされた自分——神様はなんて不公平なんだろうと思う。

——お前に決めた……

そんな湊の微笑など気づかずに、氷上は怖がらせないようにえーっと考えながら、その少女の姿の前に立った。

「あー、腹へってないか？」

山で迷ったのなら、お腹がすいてるかもと考えながら出した言葉に、湊は一瞬キョトンとした。

「なんか食うか？ 鹿や猪肉とか、木の実ならあるが……」

——酒はまずいよな。

そう頭を捻りながら言葉を出す氷上に、一瞬呆氣にとられたが、すぐに湊は怯えたふりをした。

「おなかは……すいていません。それよりも、怖くて……」

そう言つて肩を震わせる少女に、氷上は周りが妖怪だらけなのに気がついた。

「あー……、じゃあちよつと休めるところに送ってくるわ」

——ここじゃあ、星川が邪魔しそうだしな。

二人きりになって、なんとか添い臥しの役を引き受けてくれないか頼んでみようと氷上は考えた。

——やっぱり初めて抱くなら、こんな可愛い子がいいよな……

この少女なら、三年後でもきつと可愛いだろうと氷上は目を細めた。

「すみません……」

そう言う少女の肩を怖がらせないように抱くと、そつとみんなから守るように宴の場から離れた。

青白い月の光が木の梢から降り注ぐ山道を氷上と湊は連れだって歩いた。

——さあ、どう切り出したもんな……

月の光のせい、緊張のせい、どこか青く強張って見える少女の顔を下に見ながら、氷上は夏の虫の音がする山道を歩いた。

——いきなり三年後、抱かせて下さいはないよな……

それは変質者だと氷上が自答していると、隣の少女が俯きながら小さな声をこぼした。

「本当にすみません、私のせいで、宴を楽しんでいたのに……」

「なんだ、そんなことを気にしていたのか」

明るく氷上は笑った。

「そんなの気にしなくてもいいんだぜ？」

「優しいんですね」

にこりと湊は笑った。

——本当に優しい鬼……

「では、それに甘えて一つお願いしたいことがあるんですが……」

「お、いいぜ」

——そうだ！

閃いた考えに氷上はパツと顔を輝かせた。

「じゃあ、実は俺も頼みたいことがあるんだ。俺の願いを聞いてくれたら、何でもお前の願いを叶えてやる」

「本当ですね？」

「ああ、約束だ！」

すると湊はまるで暗闇に怯えて縋るように、氷上の肩に抱きついた。

「私の願いを叶えてくれるなら、何でも言うってください」

両手で湊は氷上の背中に甘えるように手を伸ばした。

そして袂に隠し持っていた短い刀を引き抜くと、すっと氷上の背中めがけて狙いを定めた。

「俺の願いは――」

どう言おうか悩んでいる氷上の美しい顔を見上げながら、湊は刀を握る手に力をこめた。

――僕の願いは、お前の命だ！

ぎらりと刀に月の光が鈍く輝いた。

湊と氷上（後書き）

こちらでは初めての投稿です。

どうかよろしく願いいたします。

感想など聞かせていただくと、嬉しいです。

狙い来る者達

「俺の願いは……」

——さあ、困った。

いざとなればなんと言えいいのかわからず、氷上はそこまで腕を組んで考え込んでしまった。

その間にも、湊は笑いながら月光に振り上げた刀を銀の線を描きながら振り下ろす。

それが氷上の背に届き、着物に触れようとした寸前、それは弧を描いて方向を変えた。

「危ない！」

咄嗟に湊は横に氷上を突き飛ばしたが、氷上は何が起こったのかわからなかった。

ただくぐもるような悲鳴があがったので地面に両手をついた状態で振り返ると、撫子の浴衣を着た少女が小太刀を抱え、その光る刃に深紅の血が糸のように絡んでいた。

その横に視線を動かすと、見たこともない鬼が盛り上がった腕の筋肉を裂かれ、噴き出す血に呻き声をあげている。

一体ではない。三匹もの見知らぬ鬼が夜の闇の中に現れていた。

その中の腕を切られた鬼がぎろりと氷上を見つめた。

「お前達！　どこの者だ！？」

——オジキの配下ではない。

氷上は睨みつけながら、頭を巡らせた。

ほかの鬼の一族が他の一族の根城に入ってくるなどただ事ではない。

けれども、腕を切られた鬼はそれを軽く舐めると、薄く笑った。

「俺らは紀の国の鬼さ」

ふんと、その鬼は氷上のまだ細い姿を舐め回すように見つめた。

「紀の国……？　紀州の鬼がこの大江山に何の用事がある！？」

——不法侵入ならば許さない。

そう眼差しで訴える氷上に、紀州の鬼達は着流しからもわかる見事な体軀を揺らしながら笑った。

「何の……？　決まっているだろう、あんた今日が契り固めの日らしいじゃないか」

ぴくりと氷上の指が動いた。

黒い長い髪の鬼が近づくと、冷たい顔で氷上の前に座り笑った。

「純血の鬼は数が少ないんだ——ましてや、伴侶の決まっていない鬼はな」

——まさか……

地面の木の葉を氷上が後ずさる微かな音が響いた。

「あんたは紀州に連れて行く。そしてうちの頭領のものになってもらう」

——頭領の下で女にされて、純血のより強い鬼の子を生涯産み続けるのさ。

そう耳元で囁かれた言葉に、氷上の顔が凍った。

——さらわれて、無理矢理女にされて……好きでもない鬼の子を生……

いやだ、それは肩に触れようとするその鬼の手に、凍えるような叫びとなって氷上の心に響いた。

しかし突然の事に体中から血がひき、震えて身動きがとれない。

——いやだ、いやだいやだ！

近づく鬼の手に顔中が蒼白になりながら、氷上はうまく言葉にならない唇を震わせた。

——触るな！

必死に逃げようと顔を背けた氷上にその鬼の手が掴みかかろうとした瞬間、しかし突然呻いて止まった。

驚いて見上げると、満月を背にした撫子の浴衣の少女が小太刀を振りかざし、相手の背中を切り裂いている。

「馬鹿！ 何をしている！ 早く逃げろ！」

——僕の獲物を横取りされてたまるか！

話はよくわからなかったが、とにかくあの鬼達がこの若い鬼を連れ去りに来たのはわかった。それもおそらく無理矢理に。

顔を宴で見られた以上、もうほかの鬼を狙うのは無理だ。

——こいつは譲れるか！

そう決意すると、湊は体が竦んでいた氷上の手をとって無理矢理に暗い山道を走り出したのだ。

足の下で山道に積もった枯れ葉ががさがたと音をたてる。

暗い道では木の葉に覆われた道を照らすのは、高い梢から降り注ぐ僅かな光だけで、地面から飛び出した根っこや横から無造作に伸びた木の枝などは見えない。

握った手が汗ばむのを感じながら、湊と氷上は暗い山の中を走り続けた。

後ろからは早い足で三体の鬼が高い身長を黒い影に変えて追いかけてくる。

ちらりと氷上は振り返った。

——ダメだ、追いつかれる！

大人の鬼と子供の鬼ではやはり足の速さが違う。どんなに純血でも氷上はまだ子供だ。そして、前には人間の子供もいた。

普通ならば、とうに息が切れてる筈なのに、その少女は氷上の手を握ったまま走り続けている。

すぐに紀州の鬼達に追いつかれないのは、この少女が細い一人しか走れないような山道を選んだことと背の高い鬼では木の梢が邪魔しそうな道を選んでくれたお蔭だ。

だが足音や息遣いがすぐ近くにまで迫っているのを感じる。

——このままだと、この子まで……

「おいお前、手を離せ！」

氷上の叫びに怪訝そうに湊は振り向いた。

「このままじゃあお前まで巻き込まれる！ お前はどこかに隠れて

逃げる！」

「嫌だね」

はつきりと湊は答えた。

——誰が譲るか！

この鬼は僕のものだと、湊は握る手に力を込めた。

「お前……」

こんな状況下でも自分を見捨てないその少女に氷上は驚きながらも、握られた腕を見つめた。

「だ、だけど、お前まで連れて行かれるぞ！？ 鬼は女には飢えて
いるんだ」

「大丈夫」

湊は叫ぶ氷上の手を強く握った。

「こつち！ 端っこを走って！」

珍しい紅葉の大木の前を言われた通り道の端により、繁る下草にがさがたと音を鳴らしながら、足をとられないように走った。

シダや苔の生えた古木などが転がり、滑りそうになるが、そのの坂道を必死になって下り降りる。

けれども下草のせいでわずかにスピードが落ちた。

「追いついたぞ！ おとなしく俺達の所へ来い！」

背後から迫り、肩を捕らえようと伸ばされてきた手に氷上の背筋が凍った。

——逃げられない！

いやだと叫びそうになった時、突然湊が氷上の体を引き寄せた。氷上が湊の胸に倒れ込み触れた温もりに目を見開いたと同時に、鬼達の視界を塞ぐ程に地面の木の葉が舞い上がる。

「な、なんだ！？」

突然の頭に降りかかった枯れ葉の吹雪に驚いて振り返った氷上の目に映ったのは、今自分を捕らえようとした黒髪の鬼が網に閉じこめられて高い木の枝に吊されている姿だった。

——なんで獣を捕らえるのに使われる罠がこんなところに……

枯れ草の下に網を敷き、獲物が踏めば、仕掛けが作動して網が自動的に獲物を捕らえる仕組みだ。

しかしここら辺りには今では人間はほとんど入ってこない筈だ。

氷上が瞬きをしている間にも、残った二体の鬼が猛然と氷上に向かって走ってくる。

「貴様、よくも！」

——まずい！

掴みかかろうと伸ばされる手に湊を連れて逃げようとしたが、湊は動かず僅かに唇の端をあげた。

その視線の前で追いかけてきていた銀杏の髪色の鬼達が急に地面に吸い込まれ消えた。

「え！？」

よく見ると、地面が突然陥没し大きな穴が暗く口を開けている。

落とし穴だ。

「なんでこんなところに落とし穴や罠が……」

呟く氷上の側で、湊は穴から這い上がるうとする土をかく音に気がついた。

——やはり竹串を敷き詰めておくべきだったな。

時間切れでそこまでできなかったが、落とし穴ではやはり鬼にはたいた効果はない。

唯一の取り柄はかなり深くて登るのに時間がかかることだろう。

——一匹捕まえるだけなら、それでも何とかなるかも思ったけれど……

やはり、安心はできない。

「さあ、今のうちに逃げよう！」

そう言つて湊は氷上の手を握つた。

「なあ、なんでお前が端っこによれと言つたところに落とし穴や罠があるんだ？」

「細かいことは気にしない！」

「いや、すつごく気になるんだけど!？」

そう言いながらも、二人は鬼が登ってくる土の音にまた走り出した。

息を切らして走り、暗い山道から、急流が流れる川沿いの岩場を二人は走っていた。

満月の白い月光が片側が切り立った崖となつた道を照らし、下では月に波を光らせながら激しく流れる黒い水音が聞こえる。

もう片方には背の高い草が生い茂り、それが山の木の茂みからこの細い道の側まで続いている。

湊はもうかなり息が切れていた。

足がよろめき、後ろを追いかけてくる足音がまだしないことに気が緩み少しよろけた時だった。

「危ない！」

どんと背を押されたと思うと、自分の肩の側を何か長い棒のような物が影となって掠めていった。

慌てて振り返ると、横の草むらから長い金属の棒を持った二人組が飛び出し、その月光に鈍く光る鉄パイプを自分達に向けてきている。

「人間……？」

アロハシャツに赤く染めた髪と剃り上げた頭、どうみてもまともな職業の人種には見えなかったが、その姿形は間違いなく人間だった。

——なんで人間が……？

月光に照らされた姿に眉を寄せる湊に、氷上が小さく囁いた。

「知り合いか？」

「あいにく突然殴りかかる知り合いはいない」

そんな声が聞こえたのかどうか、ヤクザ者と思われる男の一人が湊と氷上を眺めながら笑った。

「兄貴、湊ってのはどっちのかわいいこちゃんですかね？」

それにスキンヘッドの男は薄く笑って鉄パイプを持ち直した。

「男の方らしいぞ。くれぐれも事故に見えるようにやれとのことだ」

二人の視線が氷上に集まるのを感じた。

——僕……？

しかしその氷上の横で湊は今の言葉に頭を殴られるような衝撃を感じていた。

狙われるような覚えはない。少なくとも殺される程の恨みを買った記憶は。

しかし赤髪の男は今の言葉でさっと湊を隠した氷上を見つめながら、いやらしげに笑った。

「兄貴、一緒に浴衣の女の子はどうしますか？」

「ふん、しょうがない奴だ。後で口封じに遊んでいいから、好きなようにしろ」

「了解」

嬉しげに男は頷くと、軽く指で弾いた鉄パイプを湊だと思った氷上に振り下ろしてきた。

氷上の角は小さい。だから月の光の中では月光に輝く銀の髪と一緒にになってわからなかったのだろう。

しかし身体能力は人間の比ではない。

鉄パイプを軽々と腕の筋肉で受け止めると、その金の瞳でぎろりと男を睨みあげた。

「人間が——俺を殺せると思つか」

そう言うと、素早く鳩尾に拳を入れたのだ。

一瞬のことで、男は何が起こったかもわからず体を前屈みにさせた。

「この野郎！」

横にいたスキンヘッドの男が腕の届かない位置から氷上に殴りかかる。

それを月光に真珠色に輝く腕で受け止めながら、氷上は薄く微笑んだ。

金の瞳が月影に冴えるように美しく輝く。

それに一瞬魅入られた男に氷上のしなやかな爪が伸びようとした時、しかし僅かに動いたことでできた隙から赤髪の男が湊の腕を引っ張ったのだ。

「貴様！」

「かわいこちゃんはおブナイから、後で俺が遊んであげるまでこっちおいでね」

それが氷上の隙を生んだ。

一瞬振り返ったその間に、肩に鉄パイプを落とされる。

人間ならば肩が砕けただろうが、微かな眩暈ですんだのは鬼だからだろう。

けれども、その僅かな動きの隙を狙って鉄パイプが氷上の細い体に連打される。

「やめろ！」

咄嗟に湊は無理矢理赤い髪の子の股を蹴り上げ逃げようとした。

しかしそれが男の怒りを買って、湊の体は気がついた時には突き飛ばされていた。

右足が、白い岩場に触れる。

そして左足が着いた所は、崖の境目だった。

ゆっくりと体が後ろに傾いていく。

夜の静寂にこだまする岩にぶつかり流れる急流の音を聞きながら、湊は体がゆっくりとそこに落下していくのを感じていた。

——落ちる！

けれども五メートル程の高さのそこから落下しようとした体は、突然岩場にぶら下がり止まったのだ。

足の下にはごうごうと水が流れていく。

「大丈夫か!？」

見上げた先には、小さな角を持つ銀色の鬼が必死に自分の腕を掴んでいる。

「君……」

思わず湊は、細いその姿を見上げていた。

ついさっきまで自分が命を狙っていた鬼が、今自分を助けてくれている。

こうして腕を掴んでいるせいで反撃ができず、ただ打たれるのにまかせている体はその掌の振動から伝わりくる。

——どうして……

狙われているのは自分ではないのに。

今手を離しても誰も彼を咎めないだろうに。

打たれ続ける月光の中の姿を見上げていると、氷上の頭から紅い血が一筋流れるのが見えた。

——このままでは……

氷上は下を見下ろし尋ねた。

「おい！ お前、そこから飛び込めるか！？」

——せめて俺を助けてくれたこいつだけでも……

そう思つて叫んだが、手の先で湊はその言葉にぴくりと体を強ばらせた。

氷上を見上げるその瞳の表情に氷上は気づいた。

「まさか、お前……」

——泳げないのか！？

まるで泣きそうに懇願するかのように見上げる瞳に、氷上はきつく手を握り返した。

「いいか！ 絶対に俺の手を離すんじゃないぞ！」

けれどもその間にも氷上の体には痛烈な殴打が加えられていく。

逆らえず、身を守ることできず、氷上の口から血が滲んだ。

——ダメだ……

このままでは、二人ともこいつらにやられてしまつと氷上は腕の先にぶら下がる湊を見つめ考えた。

——それぐらいなら、いちかばちか……

ぐっと湊を握る手に力を込めると、崖に乗り出す姿にスキンヘッド

の男が慌てたように叫んだ。

「逃がすな！ 北斗様の話では泳ぎが得意だから、決して水辺に追いつくことだ！」

——北斗！？

心臓が悪くて、死の床をさまよっている筈の弟の名前が何故今ここから出るのか——

それが口から疑問になるより早く、崖から身を躍らせた氷上が湊を抱き込むと、夜の暗い急流の中に飛び込んだのである。

疑いと真実

体の側を水が渦を巻いて流れていくのがわかる。

重ねられる手を必死に握りしめ、まるで体を揉むように流れる水の中を、湊は空気を求めながら顔を動かした。

真っ暗で何も見えないが、横で水をかく腕の気配がして、長い足が渦の中を岩を避けるように動いている。

ほとんど身動きできず、ただ水の中で耐えきれなくなった酸素に苦しんで顔をのけぞらせた時、湊の体は抱き抱えられたまま渦の中から顔が出せた。

髪が水で張り付き、思うように目が開けられない。

幾度か岩に当たりそうに流されながら、何度も沈みそうな水面から持ち上げられて空気を吸う内に、やがて足が川底の石を捉えた。

巻き上がる砂の感触が裸足に触れるが、その体を背中に回された腕で支えられ、やがて大きな石の転がる河原にあがることができた。

——息が……苦しい。

水を飲み込んだせいで咳が止まらない。

だけど、それよりも苦しいのは心だった。

——どうしてだ…！？ 北斗！

咳で涙が出るが、それは体が辛いからだけではない。

——お前が僕を殺そうとしたのか！？

この大江山に行けと言ったのも、行ったのを知っているのも北斗だけだった。

——なんでなんだ！？

確かに複雑な兄弟関係だ。殺したくなるわけが、理解したくはないがわからないわけでもない。

——でも、僕は信じていたのに！

ずっとずっと、ただ一人の弟だと思っていた。

——それなのに……！

「おい、大丈夫か？」

その咳き込む自分の手を握る心配そうな声に、やっと湊は気づいて乱暴に言った。

「大丈夫だ！ 放っておいてくれよ、もう！」

——この鬼の肝をとりに来させたのも、全部僕を殺す為だったのか、北斗！？

「大丈夫じゃないだろ？　だいたいあの人間達はお前を狙ってたんじゃないのか！？」

少しむっとして氷上は湊を見つめた。

「そんなこと知らない！」

——知るわけがない！　わかりたくもない！

病状の急変も今まで仲がよかったのも、全部が全部嘘だったかもしれないなんて——知りたくもない。

全身で全てを拒む湊に苛つき、氷上は荒い手つきで湊の着物に手をかけた。

「そうかよ。それならそれでいいが、ここで風邪をひかれて寝込まれたらこっちが迷惑なんだよ！」

「何をする！？」

強引に着物の紐を解き、濡れた浴衣を剥いでいく氷上の行動に湊は焦った。

「濡れた着物いつまでも着てたら風邪ひくだろうが！」

そう言っただけかなり強引に抵抗する湊の着物を脱がせにかかる。

「や、やめ……」

「あ？　恥ずかしいのか？　なら、俺も脱いでやるから恥ずかしが

るな！」

そう言つてばつと着物を脱いだ氷上の姿を見て、湊は体の動きが止まった。

——ない！

頭を殴られたような衝撃だった。

目の前で濡れた真珠色の肌を月の光に輝かせる氷上の姿は、胸もないが、下もない。

——え！？　ないって……つまり、女の子！？

凄く背が高く凛々しいが、男でも自分のように女顔で背の低いのもいる。

——そつが、背が高くて胸のない女の子だっているよね……

そつが、女の子だったんだと月の光に輝く氷上の姿を見る内に、段々湊の頬は赤くなってきた。

一方、氷上の方はやはり頭を殴られたショックを覚えていた。

——ついている！

何故か突然抵抗をやめて顔を赤くしている湊を不思議に思いながら、今の内にと浴衣を脱がせるとまだ性別の定まっていない自分にはないものがついている。

そう言えばさっき人間達が狙っているのは男とか言っていた。

——俺は成人するまで、なりたくても男になれないのに……人間というだけで、生まれながらにっているなんて理不尽だ！

しかもこんな沢山の妖しと比べても可愛いくて小さな子が。

——世の中不条理に満ちている。

氷上は一人深く落ち込み、どんよりと淡い失恋とショックを背負っていた。

何か奇妙な沈黙が訪れた二人の空気を破ってくれたのは、後ろから軽い鼻息で近づいてきた熊の存在だった。

「金太郎！」

その鼻息に振り返り、裸で嬉しげに暖かい熊の体にすり寄る氷上を見ながら、湊は突然の猛獣に固まった。

けれど、そんな表情を察したように、氷上は明るく言った。

「こいつは俺の友達の金太郎だ！ 小さい頃からよく相撲をとっていたんだ！」

——熊に金太郎の名前……

それはある意味宿命のライバルの名前を命名されていないだろうかと思っただ、それ以上に裸で豪快に笑う氷上の姿が気になった。

「と、取り敢えず何か着て！」

——女の子が丸裸なんて！

けれども氷上はきょとんと答えた。

「そうは言っても着物は濡れてるからな。まあ、夏だから、夜でも二時間あればだいたい乾くだろうが……」

「じゃあ、せめて裸を隠して！」

何を恥ずかしがっているのかわからなかったが、取り敢えず着物が乾くまでの間、目立たない岩陰に隠れて金太郎の左右で暖をとることにした。

火を起こせば、明かりと煙で追ってくる者達に見つかるかもしれないからだ。

見えない岩陰に着物をかけ、二人その側で寝そべる金太郎の左右に体を寄せ裸を隠して暖をとった。

少し一息ついた頃、大きな熊の背を乗り越え、ひょこつと氷上が顔を出した。

「なあ——本当にお前、殺されかけた相手知らないのか？」

「君こそなんで同じ鬼に狙われてるのさ」

話をそらすように、湊は氷上の方を向かず寝転んで膝を抱えたままで答えた。

「俺か？」

——答えたくなければ答えなくてもいい。

そうすれば自分も答えずに済むと、さっきの驚きで少し冷静さを取り戻した湊は、ふんと考えた。

しかし答えは困ったような笑みと一緒に返ってきた。

「俺は——純血の鬼だからな。成人するまでは両性だから、俺を自分の妻にして一族に強い鬼を増やしたいって考える物好きがいたらしい」

「妻？」

ふと聞き咎めた言葉を湊は問い返した。

「ああ。純血の鬼は角が伸び始めたら生まれた月の満月の夜に、初めて契る相手を決めてその相手に合わせて体が成長する。それがつまり、今夜で、今夜俺に口づけたら俺を自分の女にできるから攫おうとしたというわけだ」

馬鹿だよなあと笑う氷上の声に、湊は寝転んで膝を抱えたまま違うことを考えた。

——ふうん……じゃあ、女の子ではなくなるかもしれないんだ……

折角綺麗なのに——もったいないと湊は薄く瞼を閉じた。

「で、お前はなんで狙われていたんだよ？」

遠慮というものを知らない鬼の子が美しい顔を覗かせて尋ねてくるのに、湊は仕方なく寝転んだまま顔をあわせずに返事をした。

「僕にはね——北斗っていう母の違う弟がいるんだ」

「弟？」

「そう、三日だけ後に生まれた弟」

「三日？」

不思議そうに首を傾げる氷上の様子が伝わり、湊はなんとなく体を起こし、首だけ振り返った。

「そう、たった三日違い。僕の父さんはある大きな会社の社長でね、弟の母さんはそれより大きな企業の社長令嬢で、父の婚約者だった」

「ふうん？ それで？」

古風な慣習の残る鬼では珍しくないのか、氷上は首を捻った。

「ところが父さんは大学時代に僕の母と出会い大恋愛。けれど周囲の反対にあって、結局卒業と同時に弟の母と結婚」

「捨てたのか！？ お前の母さんを！？」

「それだけなら単なる意気地なしの最低男ですんだんだけど、結婚二月後に僕の母のお腹に僕がいることがわかり、父は離婚。そして

僕の母を周囲の反対を押し切り迎え入れて結婚したんだ」

「天晴れな親父さんじゃないか」

「ここまでならね」

ふうと湊は溜め息をついた。

「ところが、今度は別れた弟の母のお腹に赤ん坊——つまり北斗がいることがわかったんだ」

「え、えーと……」

熊の向こうでさすがに氷上が反応に困っているのが顔を見なくてもわかった。

「最低通り越してマヌケだろう？ もう家中、会社まで巻き込んで無茶苦茶さ。向こうの家は怒りまくり、弟の爺さんは僕の母との離婚を迫るし、会社は次々取引を潰されて窮地に追い込まれてぼろぼろ。そんな状態で母は僕を出産したけれども、胎盤の位置が悪かったらしい。出産中に大出血を起こし、大量の輸血をしたけれども、精神的にもまいってたのかな——遂に回復することなく息を引き取ったそうだよ」

さすがに氷上は言葉をのんだ。

「そして、ここからが父のせいで最低どんぞこ編。僕が生まれた二ユースと母の死にショックを受けた弟の母が三日後に北斗を早産。生まれ月より三月も早くに産まれた北斗は、体中まだ未完成で弱くてね。特に心臓が最初からうまく動かなくて——保育器の中で沢山

の管に繋がれた弟の姿を見て、父は赤ん坊の僕を抱いたまま北斗の母に再度結婚を申し込んだそうだよ」

さすがに氷上は黙り込んだ。

—— なんとはいいいのかわからない。

「ふん、だから北斗が僕を憎んで殺したく思ってたって当たり前なのさ。僕のせいで、嫡男も長男も跡継ぎも健康な体さえ手に入らなかったんだから——」

—— そう、憎まれて当たり前。

それなのに、どうしてこんなに悲しいのだろう。 どうしてこんなに悔しいのだろう。

あの幼い紙飛行機で遊んだ日々が、ベッドの側で一緒にジクゾーパズルを解いた日々が、単なる偽りの笑いだったというだけなのに。

「え？ 北斗はお前を殺したがってないだろう？」

何を言ってるんだと首を傾げる氷上の仕草にこの時程苛ついたことはない。

「何を言ってるんだ！？ 君だって聞いただろう！ 奴らが、逃げられるから北斗から水辺には追いつめるなって言われたと叫んだのを！」

しかし氷上は笑った。

「ああ——だから、北斗は泳げないお前を水辺にやりたくなかったんだろう？ それって死んでほしくなかったってことじゃないのか？」

はっと湊は瞳を開いて、綺麗に笑う氷上の表情を見つめた。

——そうだ……その通りだ……

冷え切っていた指先から凍り付いていた頭に温もりの鼓動が戻ってくるような気がした。

——事故に見せかけるなら、こんな山奥で見つけにくいところより、夜に河か池にでも呼び出せばいい。

泳げない自分なら、突き落とすだけでよかった筈だ。

——それなのに、水辺には行かせないようにして、しかもこんな人里離れた山奥に行かせた。

正直、鬼を捜すために山に分け入り道を歩いてなければ、まず見つからなかっただろう。

「僕を……守る、ため……？」

考え出た結論が口からこぼれた時、氷上の笑顔はそれは美しかった。

「それは弟さんに確認してみな？ でも俺はそれが当たりだと思う」

その氷上の笑顔があまりに神々しいまでの慈愛に満ちていて、湊はきつと正解だと不確実ながらも胸に暖かさが押し寄せてくるのを感じ

じていた。

「さて……これから、どうするか」

空に輝く満天の星を見上げながら呟いた氷上に、心に力が戻ってきた湊は強く答えた。

「決まっている、反撃だ」

——やられっぱなしは性に合わない。

そう言いきる湊に氷上は嬉しそうに応じた。

「いいな！ だけどどうやって？」

にっと湊は笑った。

「僕に策がある」

だからこの辺の地理を教えると言う湊に、氷上は熊の頭から手を出して地面に石で絵を描きながら説明を始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7717y/>

狙われた月影―百鬼妖譚―

2011年11月29日20時53分発行